

文=伊藤亜紗

右と左という観念を消去してしまえば、死を擬似的に体験できるのではないだろうか？右と左という観念は、言葉でもって定義することはできない。それに意味を与えることができるのは、ただ自分の体のみだ。自分の体を基準にして、心臓のないほうが右、あるほうが左。登壇者が聴衆に向かって「みなさんから見て右」などと言うときにも、やはり彼は、頭のなかで自分の体を客席にすわらせ、それを基準にして「右」と判断している。相手にとっての右左がわかるためにも、自分の体が必要なのだ。右と左という観念が消えるとき、それを意味的に支えていたこの体もまた消えているに違いない。自分の体を手放す、つまり死だ。

ではどうやったら右と左の観念を消すことができるのか？まず思いつくのは、形態学的な方法だ。右と左という観念が生まれるのは、人間の体が、左右方向につぶれた平べったい形をしているからに他ならない。ということは、この体を円柱に近い形にまで変形すれば、おのずと左右の観念は消えているはずだ。とはいえ、いきなり円柱では難しいので、さしあたり前後の軸に注目するのがいいだろう。つまり、前後の軸を左右の軸と同じくらい堅固なものにすることによって、十字柱の形をめざすのだ。

そもそもなぜ人間にとって前後の軸は左右の軸ほど堅固でないのか。それは、右腕と左腕、右眼と左眼、右脚と左脚など、右左の諸器官のあいだにはいくつもの対称関係が見出せるのに対し、前後にはこのような対照関係をもつ器官が存在しないように思われるからである。このような体でもって考えるから、「前後対称」という言い方じたいが、何か意味を欠いているように思えてしまうのだ。しかし本当にそうだろうか。自分の体をもう一度注意深く観察するならば、前後対称の関係をもつ器官が見つかるのではないかと？

重要なのは、右腕と左腕の関係ではなく、右腕と右脚の関係なのである。すっかり見逃されているが、人間の腕と脚は、明らかに前後対称の関係を有している。腕は後ろに曲がることによって肘をつくり、脚は前に曲がることによって膝をつくる。人間が走る姿は、まさに前後の対称性を追い求めているかのようだ。あるいは鼻柱と脊柱。鼻柱は顔の中心線に沿って前方へ固く突出し、脊柱は骨盤に向かってゆるやかにカーブを描く。ともに内部に空洞を擁している点を考えても、これらは互いに相手を反映する前後対称な器官ではないだろうか？あるいは、口と肛門、乳房とお尻、胸筋と肩甲骨といった器官のあいだにも、明らかな前後対称の関係が見て取れる。

あるいは別の少し乱暴な方法として、右と左の仲を裂く、というやり方も考えられる。自分の右側と他人の左側、あるいは自分の左側と他人の右側のあいだの関係を重視し、自分の右側と自分の左側のあいだにある対という感覚を無効にしてしまう、あるいは少なくとも「地」に追いやってしまうというものだ。自分は右手に箸をもち、他人の左手がもった茶碗からご飯を食べる、あるいは別の人の右手がファスナーを開けようとしていたら、左手をそっと添えてやる、といった具合にだ。

ところで先日、こんなことがあった。友人のジーンズの尻ポケットから財布が落ちそうになっていて、私はそれに気づいたので、気をつけた方がいい、と注意した。彼はありがたうと言って財布をカバンにしまった。事故は未然にふせがれたと思われた。ところがその翌日になって、仕事の帰り道、私はうっかり大切なファイルが入った USB メモリーを電車の中に置き忘れてしまったのである。ふだんならそんなことはしないのに、ペンケースを膝の上に広げたまま眠り込んでしまい、どういうわけか、USB メモリーだけがそこから抜け落ちたのだ。私は、友人への忠告が、ブーメランのように返ってきて自分の額に突き刺さるのを感じた。私は友人に忠告したつもりだったが、ちがった。忠告されていたのは私だった。あのとき、友人の皮財布は、左のポケットから半分以上落ちそうになりながら、体を張って私に教えていたのだ。USB メモリーを持つ右手、気をつける、と。

今の例は、果たして右と左の仲を裂いたことになるのだろうか？少なくとも、ものを無くす、という事態は示唆的である。ものを無くす瞬間というのは、厳密にいつなのだろうか。飼い犬が飼い主の手を離れて野良犬になるのはいつなのだろうか。眠ったからといって私はそれを無くしたわけではないし、犬のことを考えていなかったからといって犬が野良犬になるわけではない。USB メモリーを無くす瞬間、何が起こったのか私は知らない。だから、その瞬間実はあなたはいなかったのではないかと、言われても反論できない。私の不在を突くようにして、友人の財布が現実を制したのである。忠告と予言とは紙一重である。どちらも同じ「無くすぞ」というメッセージだ。私の右手は友人の財布が発した予言に奪われ、現実的に USB メモリーを無くすということが起こってしまった。友人の左側が私の右側をたぐり寄せたのだ。

右と左の観念消去する方法は、他にもありうるだろう。根本的には、「観念」というものじたいを消去することも有効かもしれない。それは、もっとも死に近い死の体験になるだろう。死んでいるのに生きてると言い張って年金をだまし取ったり、人形の髪が伸びたと大騒ぎする人がいるのだから、逆に、生きているのに死ぬことだってできるのに相違ない。デュシャンの墓には「死ぬのはいつも他人です」と書いてあるそうだ。しかし「自分で自分の死を経験する」こともできそうである。これらのオブジェが、私たちを右も左もないところに導いてくれるだろう。正しく用いる者に、これらのオブジェは死を与えるだろう。

文=伊藤亜紗

待ち合わせ場所にあらわれた友人は、黒いTシャツを着ていた。そのシャツには、踊っているようなタコの姿が、白抜きでたくさんプリントされていた。私はそれを見て、一瞬、そのTシャツはタコの墨によって染められたものと思った。Tシャツの黒さが、相手を黒く染めるというタコの能力とむすびつき、タコがTシャツを黒く染めるという製造方法を私に知らせたのである。つまり一瞬のうちに、Tシャツを作るという能力がタコに与えられ、あるいは墨を吐くという性質がTシャツ製造機に与えられたのである。能力や性質、ひとことで言えば属性のこうした貸し借りは、生き物と物とのあいだ、生き物と生き物のあいだ、物と物のあいだで、ひんぱんに起こっている。

以前テレビで、ある女優が「スイカはカブトムシの味がするからきらいだ」と言っていた。この場合は、カブトムシがスイカの汁を吸うという関係が反転されて、スイカがカブトムシの汁を吸うという関係になり、カブトムシの味が、スイカへと貸し与えられたのである。あるいは、女優がスイカを食べるという行為がカブトムシがスイカの汁を吸うという行為を喚起し、「食べる」という行為を行う器官である舌のうで、女優とカブトムシが重なり、カブトムシの味が現実化されたのである。女優、カブトムシ、スイカのあいだで、味や食べる能力が貸し借りされている。

あるいは単に言葉を使うときにさえ、このような貸し借りは起こっている。たとえば〈店の前に看板が立っている〉というとき、これはかなり大ざっぱな、はっきり言えば間違った表現なのである。なぜなら筋肉も神経もない看板が本当の意味で立っているはずはなく、言葉の使い手の〈立つ〉という能力が、看板に貸し出されたにすぎないのだから。雲も本当は〈浮かんで〉いるわけではないし、パソコンも〈スリープ〉するわけではない。動詞の大部分は多かれ少なかれ擬人法であり、いわば自分の属性を対象に授けたいがために、人は動詞を使うのである。名詞の一部にも、このような働きをするものがある。瓶の先端にあいた液体が出入りする場所が〈口〉と言われ、その下の細く長い部分が〈首〉と言われるのがそれである。催眠術ではしばしばこうした名詞が活用される。瓶の〈口〉をふさぐことによって、被験者をしゃべれなくするのである。

ところで、わたしの属性は全部でいくつあるのだろうか。一〇〇だろうか。一〇〇〇だろうか。本当は無限なのだと思う。しかし、そのうち一〇〇〇くらいあれば、わたしを他の人や物から区別することができるのではないだろうか。その、わたしがいま持っている属性を、ひとつずつ、たとえばあの山に貸し与える。リストの上から順に、属性を山に授けていくのだ。この貸し借りは、金や物の貸し借りとはちがって、貸した側が貸した物を失うというダメージを負わない。だからわたしは際限なく貸すことができるのだ。山は、わたしの属性を獲得するたびに、少しずつわたしになっていく。神が人間を自分の似姿として作ったとは、おそらくこのような意味にちがいない。

一〇〇〇の属性を山に貸し与えることによって、わたしが受ける見返りは明白である。このわたしとなった山、あるいは山となったわたしのいまは、かなりの確率で、人間であるわたしよりもはるかに長く、そこにいることができるだろう。何千年後、何万年後の風景を、山であるわたしは見るのだ。何千年何万年という時のかなたに、山を使って送り届けられたわたしのいま。つまり、属性を貸し与えることによって受ける見返りとはタイムトラベルである。山というタイムマシンを使って、わたしは遠い未来へと旅立つのだ。